

「そうせすにはいられない」

2022年12月18日

コリントの信徒への手紙一 9:13～18

佐々木 佐余子

パウロはそうせすにはいられなかったのです。何をそうせすにはいられなかったのでしょうか。パウロは使徒としての権利を利用せず主のために働きたかったのです。パウロは弟子たちのように主イエスから直接声を掛けられて従った人ではありません。若い頃は迫害者でした。熱心なユダヤ教徒でした。その彼がダマスコ途上で、天から主イエスのみ声を聞き、回心してクリスチャンになった人です。ですからパウロが伝道しなければ、彼は災いの人であり、不幸な人であり、伝道することが彼の使命でした。そうせすにはいられなかったのです。9章初めから読むと、初めはつぶやき、次第に声が大きくなるように感じます。初めは遠慮がちに語り、抑えきれなくなって、はっきりと弁明しているようです。1節を読むと「わたしは自由な者ではないか。使徒ではないか。わたしたちの主イエスを見たではないか。あなたがたは、主のためにわたしが働いて得た成果ではないか。」と言っています。更に2節を読むと「他の人たちにとってわたしは使徒でないにしても、少なくともあなたがたにとっては使徒なのです。あなたがたは主に結ばれており、わたしが使徒であることの生きた証拠だからです」と言っています。ここで4回も使徒、使徒とパウロは主張しています。この手紙を読むとパウロの身边に何か起こっているのです。コリントの教会とパウロとの間で何か軋轢が起こっている。もっと想像するとコリントの信徒たちだけではなく、ヤコブやペトロを引き合いに出して何か言いたいように感じます。ここでパウロはコリントの信徒たちから何か批判を受けているように見受けられます。何を批判されているのでしょうか。それは使徒の権利についての事なのです。4節をご覧ください。「わたしたちには、食べたり、飲んだりする権利が全くないのですか」と訴えています。このことは伝道者の生活権の問題です。パウロは一体何を訴えているのでしょうか。文面を読むと、伝道旅行する場合、ペトロや他の使徒は奥さんを連れて行くこともあり、その場合費用は教会負担となっていたようです。伝道するに女性の役割が大きく助け手となるからです。パウロは独り身なので同伴者はいないけれど、その代わりバルナバや弟子テモテ、テトスと伝道旅行しています。当然費用は教会持ちになっているでしょう。これは多分パウロの使徒職を否定している偽教師から出ている批判ではないのでしょうか。5節にある使徒は主の兄弟であり、この人はイエスさまの実弟ヤコブです。ヤコブは母なる教会、エルサレム教会を牧していました。ケファはペトロです。バルナバはパウロと行動を共にしていた使徒でした。その他にも多くの使徒たちが活躍していました。アンデレ、ゼベダイの子ヤコブ、フィリポとバルトロマイ、トマスと徴税人マタイ、アルファイの子ヤコブとタダイ、熱心等のシモンとユダですが、ユダの代わりに選ばれた弟子はマティアです。全部で12人ですが、後で加えられた人はパウロとバルナバ、ソステネ、テモテ、シルワノ、テトス、エバフロデト、アンドロニコ、ユニアスです。このように多くの使徒団が結成されて各方面に伝道牧会していたのです。初代教

会の伝道の実態を詳しく見ていきましょう。使徒の内ゼベダイの子ヤコブは早くに殉教しました。ペトロはサマリア地方、ここは地中海の方ですが伝道しています。最後はローマに行って殉教しました。トマスはインドへアンデレはスキタイへ、スキタイは黒海の北、現在のウクライナとロシア辺りです。マタイはエチオピアへエチオピアは現在の紅海の西側にあります。パウロはヨーロッパへと。ざっと見てきましたが、このように使徒たちと主の兄弟合わせて 20 人ほどの伝道者が各地に散り伝道しました。集まった集会に指導者がおり、一般の信徒たちが近隣に福音を伝えていたのです。先週の木曜日にクリスマスの案内を近隣のお宅に配布しました。小田島さんや魚野さんと一緒に配ったのですが、ご近所さんたちはとても教会に友好的でにこやかに対応してくださいました。ここでこういうことを言うのもいけないかもしれないけども、近隣の方々がこんな風ににこやかに対応してくださいました事は今までなかったことです。ただポストに入れるだけなら何でもないので、呼び鈴を鳴らしての対応は今まで出来なかったことでした。でも今は普通に出来るのです。にこにこしながら奥さんが出てこられて聞いてくださいました。出欠は別にしてもとてもうれしかったです。その様にして伝道が始まるのですね。初めに戻ると、コリントの教会にいつの間にか間違った福音を教える偽教師が入り込んできたのです。例えば、十字架につけられたイエスは、偽物で本当のイエスは生きてあちらこちらに現れたと吹聴する教師、或いは、ユダヤ教の律法を守らないと救われないとする律法主義者、世の終末の教えをはき違える人たち、極めつけはパウロの使徒職を否定する人たちです。パウロは多いに苦しめられました。パウロだけではなくペトロや他の兄弟たちの生活権を奪おうとしていました。6 節を読むと「あるいは、わたしとバルナバだけには、生活の資を得るための仕事をしなくてもよいという権利がないのですか」と言っています。パウロとバルナバは教会から報酬を得ず、自給自足で伝道していたのです。パウロは天幕作り、バルナバはその頃のことですから体で働いて生活していたのだと思います。けれど、ペトロや他の使徒たちは教会から報酬を得てそれだけで生活していたのです。ということはその頃の教会は随分と献金が多かったのでしょうね。30人以上40人位いなければとても出せないでしょう。パウロたちは報酬を辞退したからと言って、権利がないわけではないのです。報酬を得る権利はあるけれどもパウロの事情・理由として辞退していたのです。そもそも伝道者が教会から報酬を得ることは当然だとはっきりパウロは言っています。9 節を読むと、「モーセの律法に、『脱穀している牛に口籠をはめてはならない』と書いてあります。神が心にかけておられるのは、牛のことですか」と聞いています。勿論人間のことです。口籠とは口の籠と書きます。イスラエルでは、刈り取った穀物は床や風通しのよい丘の上に平らな石を置いてその上に穀物を蒔き、その上にくぎを打ち付けた板を置き、牛に歩かせて打穀するそうです。打穀とは聞きなれない言葉ですが、米や麦などの実と皮を分けるために、乾燥した穂をたたき実を取り出す作業を言うのだそうです。その際、牛がつまみ食いをしないよう小さい籠をはめておくと食べられないのです。「牛が働いている時は口籠をはめてはいけないとモーセの書に書いているではありませんか」、とパウロは言っているのです。モーセは牛が働いている時は口籠を掛けなくて自

由に食べさせなさいという教えなのです。そこを引用してパウロは伝道の働きが報酬を得るのは当然だと言っています。ここで報酬について様々なことが考えられます。第1に牧師の職は単なる精神労働ではなく、様々な仕事があり園丁の仕事、牧者や農夫のような肉体労働もあると考えられます。牧師は心と体の両方の働き手であるということです。そしてまた、奴隷の報酬とも違います。奴隷はその仕事をしてもらって成すべきことをしただけという他はなく、主人は感謝しません。教会は御言葉を伝える者を奴隷としてかかえているのではなく、牧師招聘の契約を立てて迎えているのですから誇りと望みをもって働くことが出来るように準備出来たらと思うのです。教会によっては牧師を雇っていると考えるところもあるようですがこれほど牧師を傷つける嫌な言葉はありません。パウロは伝道に誇りを持ち、そうせずにはいられなかったのです。パウロは伝道者としての権利は得ていたけれど、15節にあるように、「しかし、わたしはこの権利を何一つ利用したことはありません。」ときっぱり言い切っているのです。パウロはさらに言います。16節「もっとも、わたしが福音を告げ知らせても、それはわたしの誇りにはなりません。そうせずにはいられないことだからです。福音を告げ知らせないなら、わたしは不幸なのです」とまで言います。ここにパウロの伝道者魂を見た思いです。

今朝は待降節第4主日ですので、旧約聖書のキリスト預言として最も有名なイザヤ書53章から学んでみたいと思います。使徒言行録にエチオピアの宦官の話が出てまいります。彼の名はカンダケと言ひ、彼はエルサレムに礼拝に来て帰る途中でした。彼は馬車に乗って預言者イザヤの書を朗読していました。彼は読んでいてどうも意味が分からないようでした。そこに聖霊を受けたフィリポが近づき手引きしたのです。53章にはこのように書かれていました。「彼は、羊のように屠殺場に引かれて行った。毛を刈る者の前で黙している小羊のように、口を開かない。卑しめられて、その裁きも行われなかった。だれが、その子孫について語れるだろう。彼の命は地上から取り去られるからだ」というところを読んでいたのです。カンダケはわからなかったのです。誰について言っているのか、この彼とは誰なのか。そこで、フィリポは口を開き、イエスについての福音を告げ知らせたのです。進んでいくうちに水のある所に来たので2人とも水に入って行き、フィリポは宦官に洗礼を受けたのです。この箇所はイザヤ書53章でクリスマスによく読まれるところです。53章はだいぶ長いのです。「乾いた地に埋もれた根から生え出た若枝のようにこの人は主の前に育った。見るべき面影はなく、輝かしい風格も、好ましい容姿もない。彼は軽蔑され、人々に見捨てられ、多くの痛みを負い、病を知っている。」とこの後も続くのですが。そして讚美歌にも歌われています、エッサイの根より（248番）、というところはイザヤ書11章です。平和の王、「エッサイの株からひとつの芽が萌えいで、その根からひとつの若枝が育ち、その上に主の霊がとどまる。知恵と識別の霊、思慮と勇気の霊、主を知り、畏れ敬う霊」とあります。読んでみるとイエスさまを彷彿させますね。主イエスの復活の後、初代教会は旧約聖書を読んでいったのです。すると主イエスのお姿に合致する預言を幾つも見出したのです。非常に驚き、そして、悟ったのです。この方こそ、罪を贖ってくださる神の救い主

だと覚えたのです。そう思いながら改めて旧約聖書を読み返した時、預言者たちにより約束されていたのだと悟りました。『幼児さんびか』にこのような讃美歌があります。「昔ユダヤの人々は、神さまからの御約束、尊いかたのお生まれを、うれしく待っておりました。尊いかたのお生まれを、みんなで楽しく祝おうとその日数えて待つうちに何百年もたちました。ある日天の御使いは、喜びなさい神の子が、みんなのためにお生まれと高いお空でつげました」という讃美歌です。この歌は聖書の圧縮版のようでわかりやすいですね。来週はクリスマス礼拝を守ります。